

乙 貞

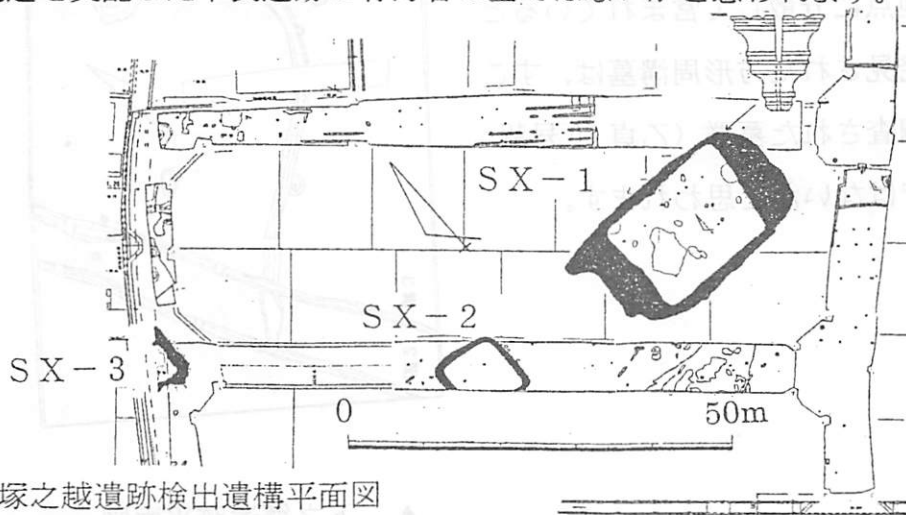
第130号 通巻23巻 第3号
2003年9月1日 発行
守山市立埋蔵文化財センター
Tel・Fax 077-585-4397
〒 524-0212
守山市服部町2250番地

1、塚之越遺跡（第17次調査）の調査

古高町で宅地造成に先立ち発掘調査を進めてきましたが、新たに古墳時代前期末の古墳3基が発見され、周濠から土器や鉄製品、玉などが出土しました。

SX-1は東西19m、南北13.6mを測る長方形をした古墳です。東西辺の周濠は幅5mと広いのですが、南北辺は0.8~1.2mと狭くなっていました。通常、古墳の周濠の幅は均等であることが多いのですが、定形化していない発生期の古墳のような印象を受けます。周濠からは、4世紀末の土師器とともに滑石製の琴柱型石製品や白玉などが出土しました。琴柱型石製品は儀杖の模造品とみられ、王の権威を示す祭祀の道具と考えられています。石の特徴から但馬地方で産出される滑石によって製作されたと推定されます。SX-1の西側では一辺約9mの方墳（SX-2）が発見されました。周濠からは4世紀末の大型の壺や滑石製の紡錘車、碧玉製の管玉などが出土しました。調査区西隅では一辺約4mの方墳（SX-3）がみつかりました。幅約1mの周濠から出土した三種類の鉄斧は木の伐採や加工など用途に応じて使い分けられた斧と見られます。

塚之越遺跡は方形周溝墓・前方後方周溝墓や方墳が発見されていて、古墳時代前期の大規模な集落遺跡である下長遺跡の墓域とみられます。今回見つかった3基の古墳は、琵琶湖上の交通を支配した下長遺跡の有力者の墓ではないかと思われます。（伴野）



▲ 塚之越遺跡検出遺構平面図

2、下之郷遺跡（第52次調査）の成果

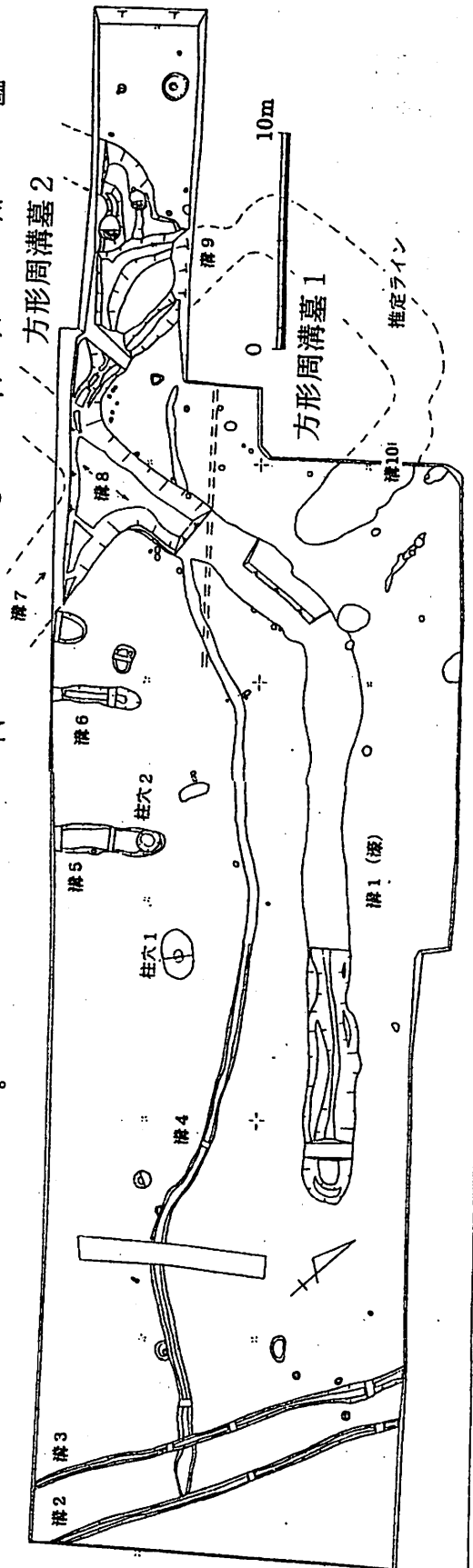
すこやかセンターの北約100mの水田地で、民間の集合住宅建築工事に伴い1,720㎡を対象に発掘調査（一部確認調査）を実施しました。

その結果、大溝や方形周溝墓、柱穴等を検出しました。大溝（溝1）は幅約2.5m、深さ1.2mを測り、断面U字形を呈するものです。溝の中～下層より、弥生時代中期後半の土器や木製農具などが出土しました。今回の調査地の北側でも同様な大溝が3条並行して伸びることが判明しています。これらの溝は、居住域と外界を分ける役割や集落内の排水、外敵の侵入を防ぐ等の機能が考えられます。

調査区の西側では、方形周溝墓が2基検出されました。方形周溝墓1は一辺約11mの規模で、周囲に深さ1.2mを測る断面U字形の周溝が掘られていました。溝底から土器・石器・木製品などが出土していて、壺2点（弥生中期）がほぼ完全な状態で見つかりました。墓に供えられた土器が、周溝内に転落したものと考えられます。この他、周溝内から戦いや儀式に使用された木製の盾の一部が出土しています。

下之郷遺跡の墓域は、播磨田町・吉身町・石田町・金森町など複数の地点に分散して営まれていると考えられます。今回発見された方形周溝墓は、すこやかセンター西隣で調査された墓群（乙貞70号報告分）と関連するのではないかと考えられます。

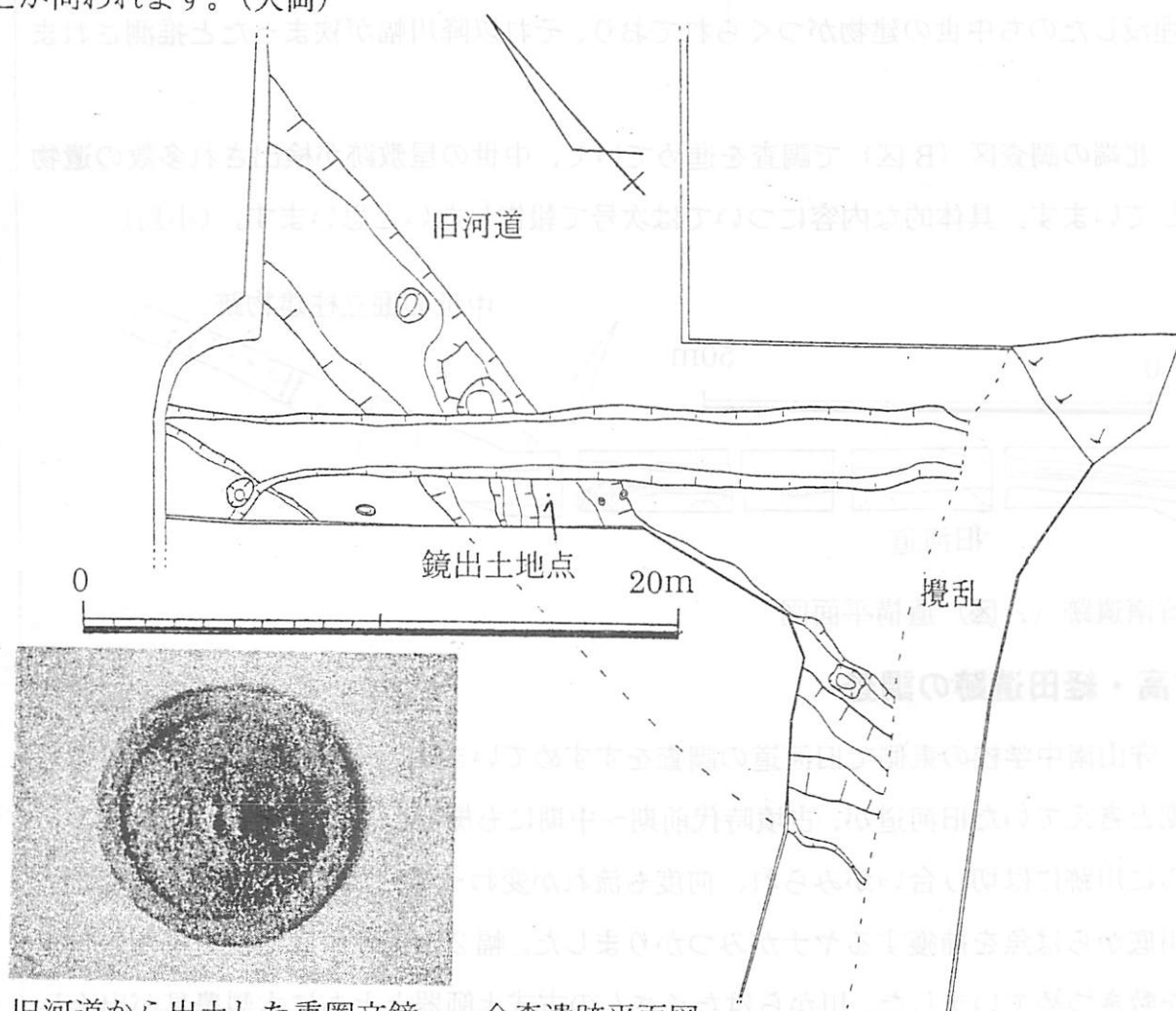
（川畑）



▲ 下之郷遺跡平面図

3、金森遺跡(第2次調査)の成果

区画整理事業に伴う金森東・金森遺跡の発掘調査は、7月より金森遺跡の範囲内へと移って旧河道や溝が検出されています。旧河道からは弥生時代後期から古墳時代前期の土器とともに、^{じゅうけんもんきょう}重圏文鏡と呼ばれる鏡が出土しました。この鏡は直径7.7cmと小型で、同心円状の帯を多重に巡らせたもので、日本製と考えられます。このような鏡は旧河道近くで出土することが多く、水辺で行われた祭祀に使用されたとみられます。金森町では昭和40年代に同様な鏡が偶然発見されていて、川の周辺で祭祀が盛んにおこなわれていたことが伺われます。(大岡)



▲ 旧河道から出土した重圏文鏡 金森遺跡平面図

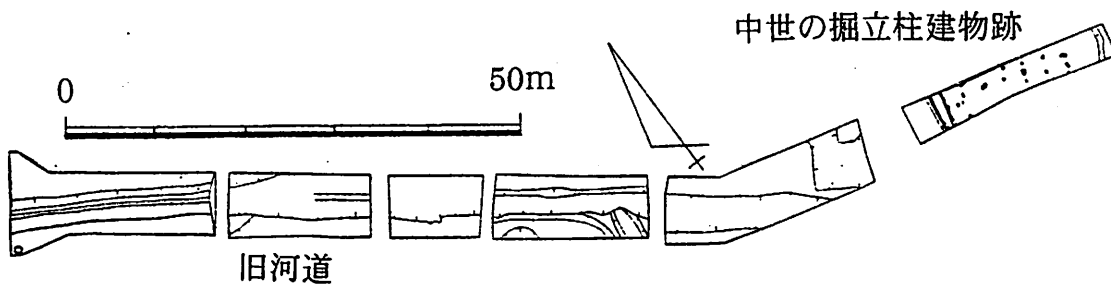
4、焰魔堂遺跡の調査

8月末までに、調査予定地の約半分の調査を終えました。前号の報告以降、新たに8基の方形周溝墓が検出されました。台状部の一辺は約14mもあり、溝幅約3m、深さ1.2~1.6mを測ります。溝からは古墳時代前期の遺物が若干出土しています。溝の規模からすると、方形周溝墓というより古墳とみるべきでしょうか。これらの墓は、まだ南西側にひろがるとみられ、大きな墓域を形成していると推定されます。(畑本)

5、欲賀・欲賀南遺跡の調査

欲賀土地区画整理事業に伴う発掘調査を7月から始めました。これまでに、境川沿いの水田地（A区）で、縄文時代晩期、古墳時代前期、平安～室町時代にかけての土器が出土する旧河道と、中世（鎌倉～室町時代）の掘立柱建物跡を検出しています。境川は旧栗太郡と旧野洲郡を分けた川です。当時はかなりの川幅があったといわれ、今回の調査結果もそれを裏付けています。調査区一帯は長い間、境川の影響を受けていたのでしょうか、旧河道が埋没したのち中世の建物がつくられており、それ以降川幅が狭まったと推測されます。

現在、北端の調査区（B区）で調査を進めていて、中世の屋敷跡が検出され多数の遺物が出土しています。具体的な内容については次号で報告したいと思います。（小島）



▲ 欲賀南遺跡（A区）遺構平面図

6、古高・経田遺跡の調査

現在、守山南中学校の東側で旧河道の調査をすすめています。その結果、これまで弥生時代後期と考えていた旧河道が、古墳時代前期～中期にも機能していたことがわかりました。さらに川跡には切り合いがみられ、何度も流れが変わっていたことも判明しました。

この川底からは魚を捕獲するヤナがみつかりました。幅2m程の川底に杭を打ち込み植物の束を敷きつめていました。川からはたくさんの古式土師器とともに木製農具が出土しました。川の周囲では古墳時代の竪穴住居がみつかっており、古墳時代の生業の様子が伺われます。（森山）

<<塚之越遺跡現地説明会終了>> 去る7月26日(土)古高町塚之越遺跡で、現地説明会を開催しました。炎天下のなか、150人余りの見学者が訪れ、古墳跡や古墳から出土した琴柱型石製品などを熱心に見学していました。「巨大な墳丘や大量の副葬品をもたない古墳に光をあてることで、古墳時代や地域の歴史がより豊かになる」と、コメントを頂いた大阪大学の福永伸哉先生の言葉が印象に残りました。【BK】